

鍬の機能に関する基礎的研究

樋上 昇

本稿では伊勢湾周辺地域における、弥生～古墳時代の鍬の編年作業をおこなった。さらに、これらの鍬の刃部幅・柄の装着角度を検討した結果、民具学的な機能分化には必ずしも適合しないことがわかった。おそらく弥生時代の鍬は使用者≒製作者の関係にあるため、個人の身体的特徴や作業姿勢の違い（好み）によってバラつきが認められる。半完成品が広域に流通する古墳初頭以降、急速に規格化が進み、その結果、機能による鍬の細分化が成立したものと考えた。ただし、民具学的な器種分化はさらに後のことであり、その萌芽は直柄風呂鍬が出現する古墳後期であると推定した。

1 はじめに

本稿では、伊勢湾周辺地域（図1）から出土した、弥生前期から古墳後期前半（6世紀前葉）の鍬類について、まず形態分類と編年的な位置づけをおこなう。つぎに、それぞれの鍬の刃部幅と柄孔の角度（膝柄・反柄の場合は、台部と柄部の角度）の相関関係を示し、これらの考古資料が民具学的な鍬の機能に合致し、同様の機能論的研究が可能なのかを検討してみたい。

なお、編年表に掲載した資料は、原則として完成品のみとし、完成品が確認されない形態についてのみ、未成品を載せている。また、やや煩雑になるが、他地域との比較を容易にするため、『木器集成図録 近畿原始篇』で上原眞人がおこなった分類（上原1993）に合致するものについては、上原分類を併記しておく。

2 直柄鍬の編年的位置づけ

弥生～古墳時代の鍬には、鍬の身部上半に孔をあけて真直ぐな柄を通すタイプの鍬（直柄鍬）と、身部の上に棒軸状の突出部をもうけ、その突出部に木の枝分かれ部分などを利用した「く」の字状を呈する膝柄や反柄を固定するタイプの鍬（曲柄鍬）が存在する。まず本章では、直柄鍬について、編年的な位置づけをおこなう（図2～5）。

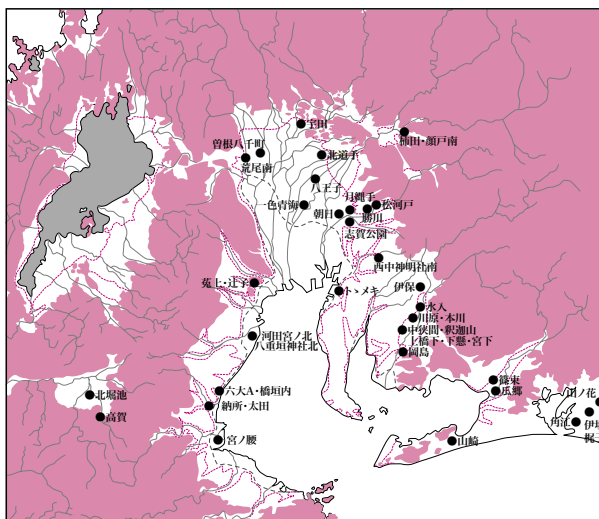


図1 木製品出土主要遺跡位置図

(1) 弥生前期

弥生I期（前期）の直柄鍬は、三重県津市納所遺跡（1～4・26・27）と愛知県春日井市松河戸遺跡（5～7）から出土している。器種としては、直柄諸手鍬（1）・直柄平鍬（2・3・5・6）・泥除け具（4・7）・直柄多又鍬（26・27）がある（以下、本章ではそれぞれの鍬の名称から直柄を省略する）。

諸手鍬は中央の円形柄孔周辺につくり出された隆起部のある面にむかって上下ともに強く湾曲している。上原分類では、狭鍬I A1式に相当する。

平鍬は、いずれも柄孔の周囲に明確な隆起部をつくり出す。I類（2）は平面が縦長の長方形で、隆起部が丸く、身部の下端ではなく側縁

に刃をつけている。柄孔は円形ではなく、やや隅丸の方形を呈する。上原分類の狭鍬 IIA5 式に属する。II 類 (3・5) も同じく縦長の長方形の平面だが、下端部に刃をつける。上下に長い舟形の隆起部をもち、柄穴は円形である。上原分類では、広鍬 IIA1 式にあたる。III 類 (6) は全形が不明だが、舟形隆起部の両横に逆三角形の孔をあけ、さらにその横の側縁部には 2 つの小突起をもうける。この逆三角形の孔と小突起は泥除け具を固定するための細工と考えられる。上原分類の広鍬 I 式に該当する。

泥除け具 (4・7) は、文字どおり水気を含んだ土壌に鍬を打ち込む際に、跳ねた泥から手元を守るための補助具で、かつて丸鍬とよばれたものに相当する。4・7 とともに陣笠状の立体的なつくりで、上原分類では泥除 I 式とされている。前述の直柄平鍬に固定するための細工はみられないが、III 類の直柄平鍬に装着されたとおもわれる。

多又鍬 (26・27) は平鍬同様、舟形ないしは円形の隆起部をもち、下端には熊手状に 3 本の細い刃部をつくり出す。上端部は半円形と方形のものがある。

(2) 弥生 II 期

弥生 II 期 (中期前葉) の直柄鍬は、愛知県清須市の朝日遺跡においてのみ認められる (8～11)。このうち、10・11 は大型方形周溝墓の周溝底面からの出土である。

諸手鍬はこの時期まで残らず、多又鍬も現状での出土例はない。

平鍬では、I 類から隆起部の不明瞭な IV 類 (8) へと移行し、II 類 (9) は弥生 I 期の形態が維持されるが、柄孔は隅丸方形を呈する。なお、この IV 類は上原分類の狭鍬 IIB 式にあたる。この時期、新たに舟形の隆起部が下方に長くのびる V 類が出現する。平面形は縦長の長方形だが、柄孔付近で両側縁がわずかにくびれ、上半部に鋸歯状の細工をほどこす例 (11) もある。

(3) 弥生 III 期

弥生 III 期 (中期中葉) は朝日遺跡 (12～16・28～30) のほか、納所遺跡、愛知県西尾市岡島遺跡、豊橋市瓜郷遺跡などの出土例がある。

平鍬 IV 類は弥生 II 期以来の幅狭タイプ (13)

に幅広タイプ (12) が加わる。II 類 (14) は残り、V 類 (15) は柄孔の両側縁がゆるやかにくびれ、上端に逆台形の抉りがつく。新たに VI 類として、隆起部は逆水滴状を呈し、柄孔の両側縁が強くくびれるタイプが出現する (16)。このうち、14・15 は大型方形周溝墓の周溝底面から出土している。

この時期、身部の全長が 15cm 以下、最大幅が 10cm 程度で、上端部が丸く、両側縁・下端部ともに刃がつく小型鍬 (28) が出現する。このタイプの鍬は弥生 III～IV 期の伊勢湾周辺地域から静岡県の駿河湾沿岸地域にかけて特徴的に認められる器種である。完形品では、弥生 IV 期の 34 のように、60cm 以上の柄がつく。

29 は木目が身部に対して横方向に走り、平面形が縦方向よりも横方向に長い、いわゆる横鍬である。現在、伊勢湾周辺地域で弥生前期～中期に属する直柄横鍬はこれ 1 例のみである。

30 は多又鍬で、4 本歯で、身部上端は隅丸方形を呈し、柄孔は横長の方形である。

(4) 弥生 IV 期

弥生 IV 期 (中期後葉) は朝日遺跡 (17～22・31～36) のほか、各地で多数の出土例がある。

平鍬 (17～22)・小型鍬 (31～34)・多又鍬 (35・36) はいずれも弥生 III 期以来の系譜を引き継ぐ。このうち平鍬では、VI 類の出土が各地で特にめだち、未成品も多数出土する。

小型鍬の出土例も多く、朝日遺跡出土の 33 には、両端を折り曲げるタイプの鉄刃を装着した痕跡が認められる。

(5) 弥生 V 期

弥生 V 期 (後期) は朝日遺跡 (23・24) のほか、愛知県豊田市川原遺跡 (25) の出土例があるが、弥生 IV 期に較べて格段に木製品全般の出土量が極端に減少する。

直柄鍬は平鍬のみで、IV 類 (23)・VI 類 (24) がある。下端の刃部幅が広く、上端部が丸い VII 類 (上原分類の広鍬 IIA3 式) は未成品が川原遺跡で出土しているのみである。

なお、泥除け具もわずかながら、この時期から出土するようになる。

(6) 弥生終末期～古墳前期前半 (2・3 世紀)

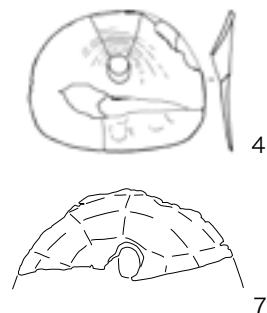
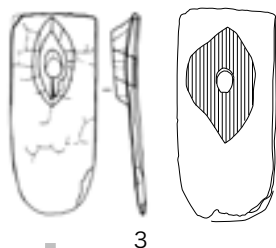
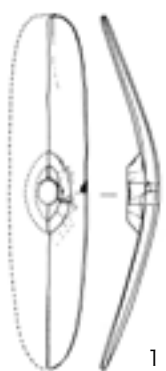
弥生 V 期の貧弱な様相に対し、突如として

直柄諸手鋤

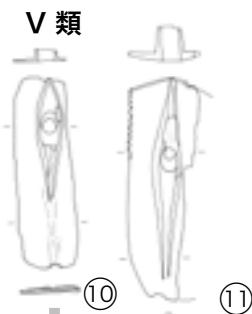
直柄平鋤

泥除け具

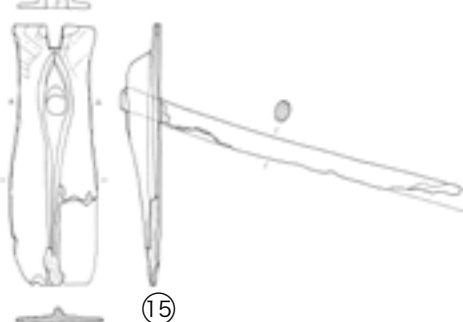
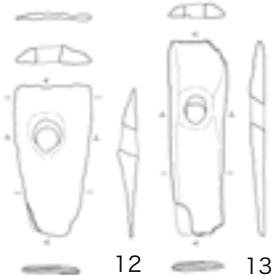
弥生Ⅰ期



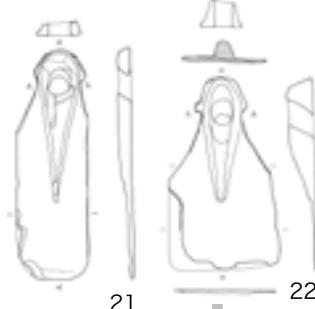
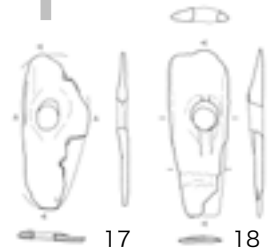
弥生Ⅱ期



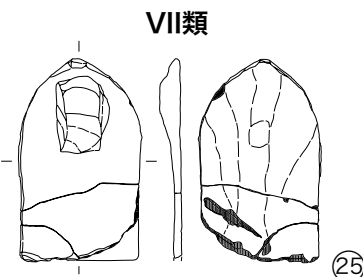
弥生Ⅲ期



弥生Ⅳ期



弥生Ⅴ期



○は墳丘墓および
その周辺より出土

1~4 三重:納所
5~7 愛知:松河戸
8~24 愛知:朝日
25 愛知:川原



図2 直柄鋤編年表-1

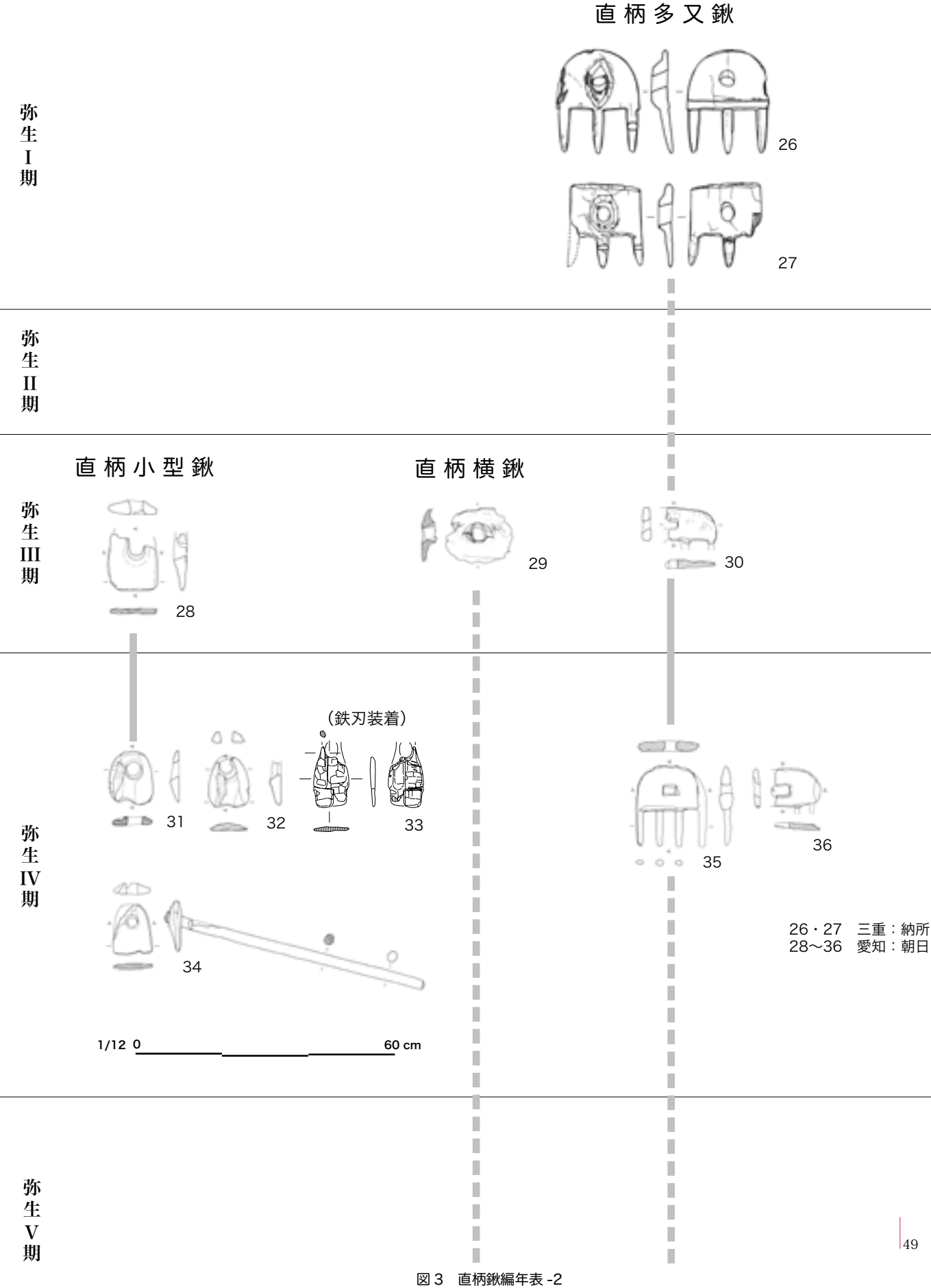


図3 直柄鍬編年表-2

各地で出土例が増加し、活況を呈するようになる(37～47・55～63)。

平鍬では、弥生Ⅲ期以来のⅣ類(37)、Ⅵ類(38・39)が濃尾平野以外の地域に遺存しており、うちⅥ類はこの時期で姿を消す。新たに泥除け具の装着を意図して身の上端部を幅広にし、隆起部とは反対側の面に断面が逆台形の溝(蟻溝)を切る鍬(Ⅷ類-上原分類の広鍬ⅦA3式に相当)が出現する(40～45)。このうち、40～42は平面形・法量に遺跡の単位を超えた広い地域におよぶ強い企画性が認められることから、特にⅧa類として分類する。ただし、隆起部の形態は遺跡ごとにやや異なる。一方、43～45はⅧa類をモデルとしつつ、1点ごとに個性が認められるグループをⅧb類としてまとめておく。

泥除け具は、弥生Ⅰ期とは異なる平面的な作りである(上原分類の泥除Ⅲ式)。平鍬Ⅷ類の蟻溝に対応して、身の上端部に断面が逆台形の突出部(蟻ホゾ)をもうけ、下端部中央付近には装着角度を一定にするために柄と紐で固定するための小孔があく例が多い(47など)。

55～57は、柄の装着角度が105.5～126.0°といずれも鈍角で、木目が身に対して横方向に走る鍬である。しかも身部の下端が柄孔隆起部のある面(使用者側)に強く反り返る形態をもち、刃は下端部ではなく両側縁についている。この種の鍬を上原は横鍬Ⅰ式とし、山田昌久は除草用の鍬として払い鍬と命名した(山田2003)。本稿では山田の名称にしたがう。身の側縁に刃がつくことから、弥生Ⅰ期以来の平鍬Ⅰ・Ⅳ類とおなじ系譜に属する可能性がある。

また、横鍬も久々に現れ(上原分類の横鍬Ⅱ式)、専用の泥除け具(上原分類の泥除Ⅱ式)が装着される(58・59)。さらに横鍬とは別に、下端部に鋸歯状の歯をつけたエブリ(サラエ)も認められる(60・61)。この種のエブリを上原は横鍬Ⅲ式に分類している。このほか、多又鍬も出土している(63)。

さらに特殊な例として、福岡平野を中心とする北部九州地方に特徴的な縦長の方形柄孔を有する鍬が岐阜県大垣市で数例認められる(62)。

この種の鍬はほぼこの時期にのみ、滋賀県湖東地方や北陸地方からも出土していることから、日本海からのルートで伊勢湾周辺地域に流入したと考えられる。

(7) 古墳前期後半～中期前半(4世紀～5世紀前半)

前段階に較べて出土量は著しく減少する(48・49・64・65)。

48は平鍬Ⅷa類で、49はその泥除け具。64・65は横鍬で、特に64は泥除け具装着のために、上端部に突起をもうける。柄孔は方形で隆起部をもたない。現状では、岐阜県東濃地方の可児市周辺のみ分布範囲が限定される。

(8) 古墳中期後半～後期(5世紀中葉～6世紀)

この時期は直柄鍬の出土量がやや増加する(51～54・66～74)。

51は刃部幅が8.9cmと狭く、身と柄は110.4°と鈍角に装着されている。柄孔周辺の隆起部は逆水滴状でしっかりしており、隆起部とは反対側の面上端に段がつく。通常、隆起部は使用者側とは反対の面につき、かつ身に対して鋭角に柄が装着される場合が多いことから、本例は意識的に逆方向に柄を装着していることがわかる。明確な隆起部や本来ならば使用者側の面上端につく段など、弥生Ⅱ期以来のⅣ類とは異なる特徴や、この時期には珍しい刃部幅の狭い鍬であることから、一応Ⅸ類としておくが、Ⅷa類を再加工しての転用品である可能性が高い。なお、上原分類では狭鍬ⅡA3式に相当する。52はⅧa類の未成品で、二連の連続成形段階のものである。50は上原分類では広鍬ⅤA3式で、筆者の分類ではⅧb類にあたる。

53は弥生Ⅰ期以来の直柄平鍬とは全く異なる系譜として、この時期新たに登場する直柄鍬である。身の上半部は截頭三角形で、下半部にはU字形の鉄刃が装着される。柄孔は縦長の長方形で、54の柄がつく。柄孔の周囲に隆起部をもたず、側面形は真っ平らである。これは、近世のいわゆる風呂鍬の原形にあたるもので、ここでは直柄風呂鍬とよんでおく。

66・67は横鍬で68はその泥除け具。70・71は下端部が鋸歯状になるエブリで、72・73は下端部が平らなエブリである。柄孔は横長の

直柄平鍬

泥除け具

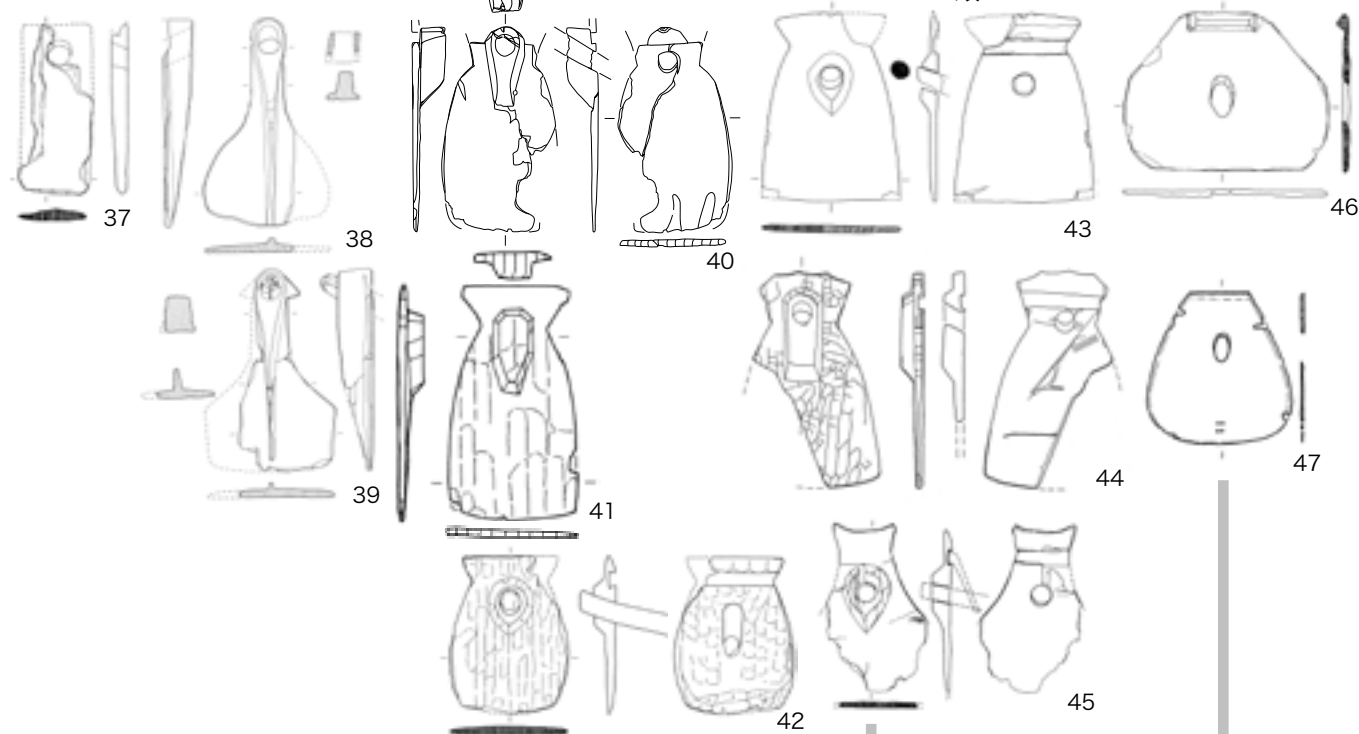
弥生終末期～古墳前期前半（二・三世紀）

IV類

VI類

VIII a類

VIII b類



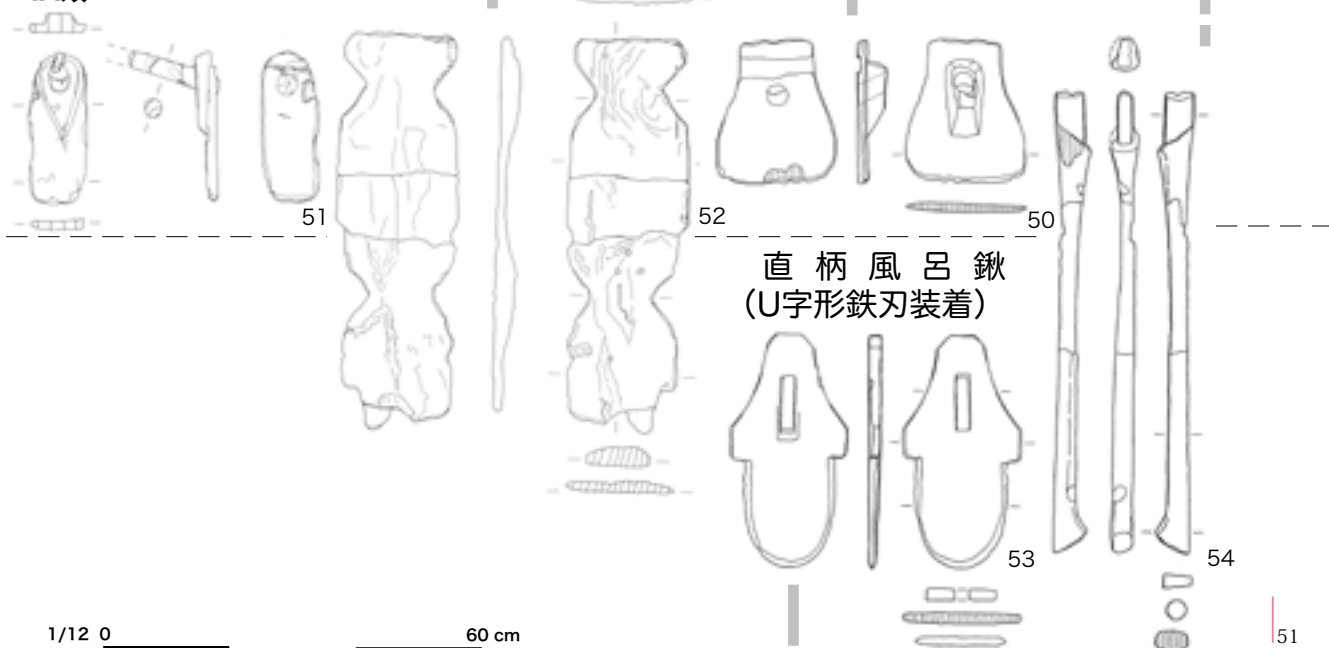
（四世紀～五世紀前半）
古墳前期後半～中期前半

37・42・43・45・46 三重：六大A
40 愛知：八王子
51・52 愛知：勝川
41・47 岐阜：荒尾南
44・48～50・53・54 岐阜：柿田
38・39 静岡：角江



IX類（VIII a類からの再加工？）

（五世紀中葉～六世紀）
古墳中期後半～後期



直柄風呂鍬
（U字形鉄刃装着）

1/12 0 60 cm

51

図4 直柄鍬編年表-3

直柄 払い鋤



55



56



57

エブリ・サラエ

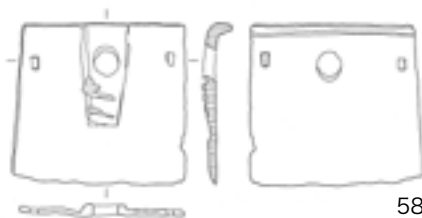


60

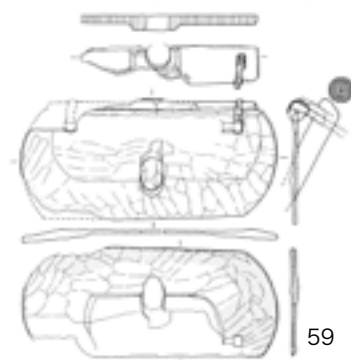


61

直柄 横鋤
泥除け具

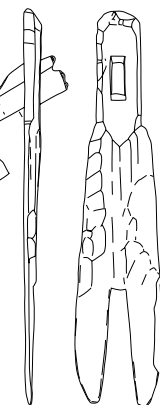


58



59

北部九州型
直柄 二又鋤



62

直柄 多又鋤



63

弥生終末期～古墳前期前半(二・三世紀)

(四世紀～五世紀前半)
古墳前期後半～中期前半

(五世紀中葉～六世紀)
古墳中期後半～後期

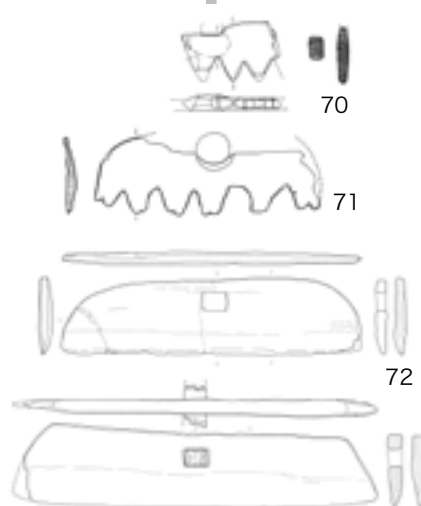
55～57・59～61・66・70・74 三重:六次A
67・68・71 三重:河田宮ノ北
62 岐阜:荒尾南
64・65 岐阜:顔戸南
58 岐阜:柿田
63 静岡:角江
69・72・73 静岡:山ノ花



64



65



70



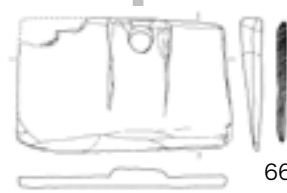
71



72



73



66



67



68



74

変形諸手鋤



69

1/12 0 60 cm

図6 曲柄鋤編年表-1

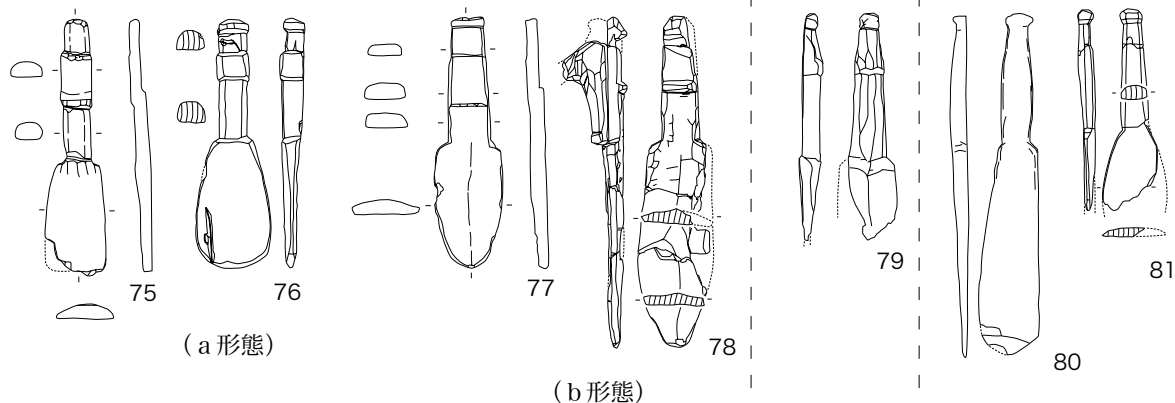
曲柄平鍬

軸部A類

軸部B類

軸部C類

弥生Ⅲ
Ⅳ期



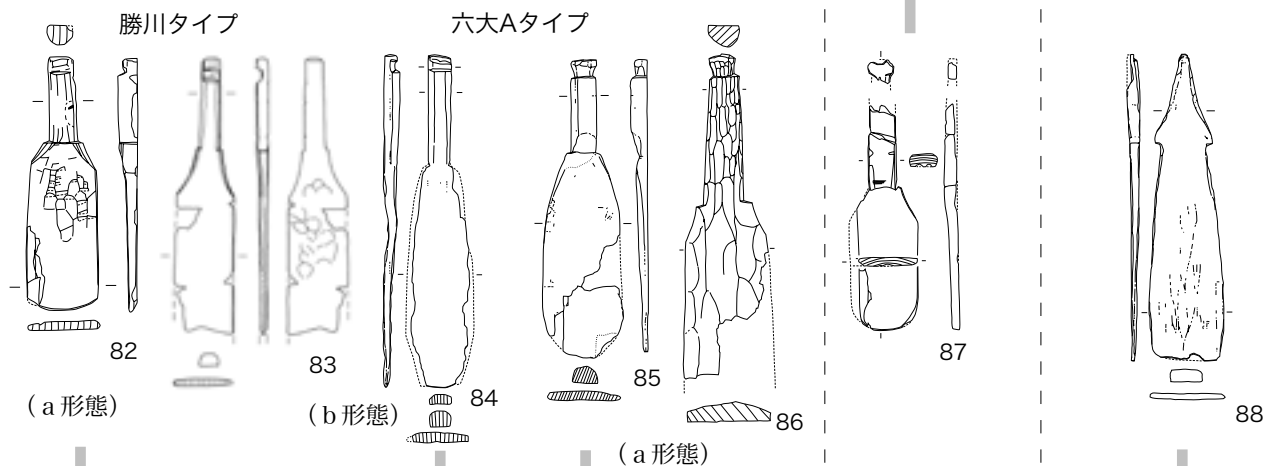
伊勢湾型曲柄平鍬Ⅰ類

ナスビ形曲柄平鍬

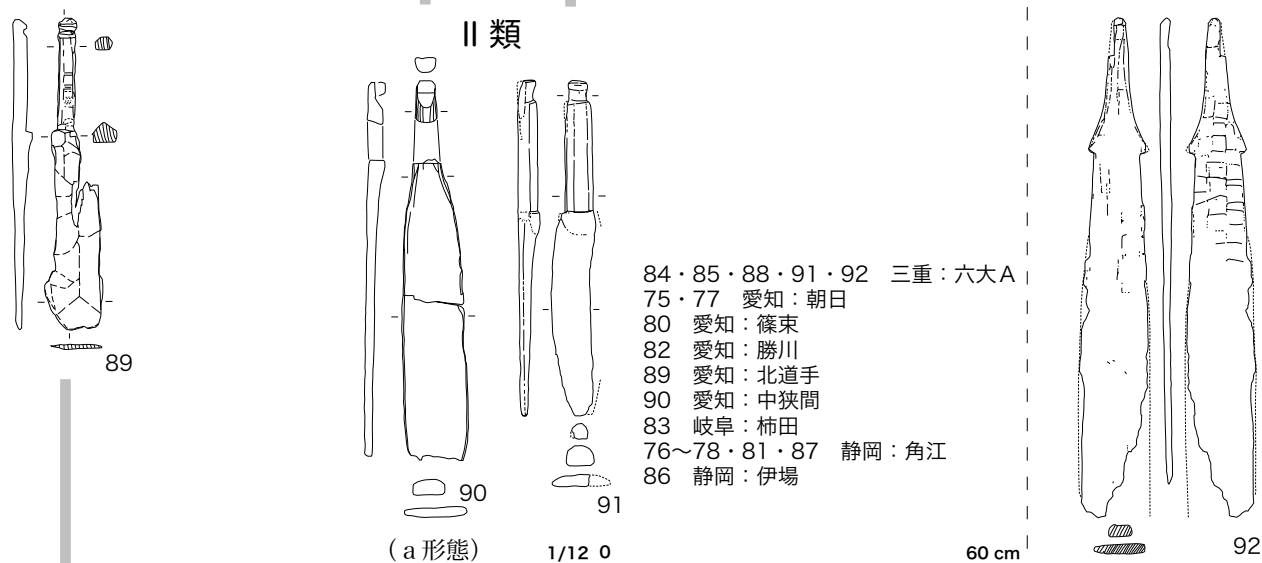
軸部D類

軸部E類

弥生Ⅴ期
古墳初頭



古墳前期前半
(三世紀)



84・85・88・91・92 三重：六大A
75・77 愛知：朝日
80 愛知：篠束
82 愛知：勝川
89 愛知：北道手
90 愛知：中狭間
83 岐阜：柿田
76～78・81・87 静岡：角江
86 静岡：伊場

1/12 0 60 cm

図7 曲柄鍬編年表-2

長方形。74 は多又鋏である。

69 は、長手方向の両端が柄孔周囲の隆起部がある面にむかって反る鋏で、一見、弥生Ⅰ期の諸手鋏に似ている。ただし、隆起部の形状は図面上の下にむかう逆水滴状で、下端部中央に三角形の抉りが入る。左右両端は欠損しているが、完形品のなかには片側にのみ U 字形の鉄刃を装着する細工をもつものがあることから、図面上の縦方向にも横方向にももちいられる多目的な鋏である。関東以北に多く分布しており、この地域では静岡県西遠江地方がその分布圏の西端に位置する。必ずしも適当な名称ではないが、黒崎直の命名（黒崎 1996）にしたがって変形諸手鋏とよんでおく。

3 曲柄鋏の編年的位置づけ

曲柄鋏に関しては、筆者が 1989 年以降、たびたびその分類案と変遷案を示してきた（樋上 1989 ほか）ため、本稿での詳述はひかえ、概略のみ記す。

まず器種として（曲柄）平鋏・二又鋏・多又鋏が存在する（図 6～8）。この地域では弥生Ⅲ期に出現し、弥生Ⅴ期には伊勢湾型（東海系）曲柄鋏とよばれる独特の形態を生み出して、弥生終末期から古墳中期前半には近畿地方以東の地域に広く分布するようになる。

一方、西日本では弥生Ⅲ期頃、岡山県の吉備地方でナスビを縦割りにしたような形状をもつ曲柄鋏（ナスビ形曲柄鋏）が創出され、弥生終末期に大阪府の河内平野に定着する。さらに古墳前期には東海系曲柄鋏と拮抗して全国に伝播する。

この地域では、伊勢湾型曲柄鋏に 2 つのタイプが存在し、愛知県尾張地方に特徴的なものを勝川タイプ（82・83）、三重県伊勢地方に特徴的なものを六大 A タイプ（84・85）とよぶ。弥生終末期には奈良盆地周辺から六大 A タイプが、古墳前期前半には北関東（群馬県）から勝川タイプが多く出土する。また、愛知県西三河地方では両者とも在地で製作されている。伊勢地方では、いち早くナスビ形曲柄鋏が流入するが、伊勢湾型曲柄鋏も根強く残る。

古墳前期後半（4 世紀）には岐阜県西濃地方

にナスビ形曲柄鋏が流入し、中期前半（5 世紀前葉）には尾張・三河地方を飛び越して西遠江地方へと分布圏を拡大する。

古墳中期後半（5 世紀中葉）頃、このナスビ形曲柄平鋏に U 字形の鉄刃を装着することによって、この地域の伊勢湾型曲柄鋏が一掃され、尾張・三河地方にもナスビ形曲柄鋏が定着するようになる。

柄との対応関係では、古墳前期後半以降、ナスビ形曲柄鋏には反柄がつくことがわかっており、伊勢湾型曲柄鋏および古墳前期前半以前のナスビ形曲柄鋏には膝柄がともなう。

4 曲柄鋏の刃部幅および柄の装着角度の検討

(1) 曲柄平鋏の刃部幅

まず、曲柄平鋏の刃部幅を検討する（図 9）。

弥生Ⅳ期および古墳初頭は 10～12cm をピークとする正規分布を示す。ただし全体的には、弥生Ⅳ期は 10cm 未満に、古墳初頭は 12cm 以上にシフトしており、静岡県浜松市の角江遺跡では 20cm を超える刃部幅の平鋏がある。

古墳前期には、伊勢湾型のピークが 8～10cm とより狭い刃部幅に移行するのに対して、ナスビ形は 14～16cm と逆に幅広化傾向を示す。

古墳中期以降は 12～14cm をピークとする分布になるが、鉄刃を装着しないナスビ形の刃部幅が 7.3cm～17.5cm と著しくバラつくのに対し、鉄刃装着のナスビ形は 12～14cm と 16～18cm の 2 つの山をもつ分布域を示す。

上原による近畿地方の例と比較すると、平鋏 C（非ナスビ形）は 10cm と 12cm あたりにピークをもつ点や、鉄刃装着のナスビ形（平鋏 D）の刃部幅が 14cm あたりにピークがくることなど、共通点が多い（cf.1）。特に U 字形の鉄刃は製作地が限られる規格品であることから、鉄刃のサイズにあわせて身部（風呂部）がつくられた可能性が高い。

(2) 曲柄二又鋏の刃部幅

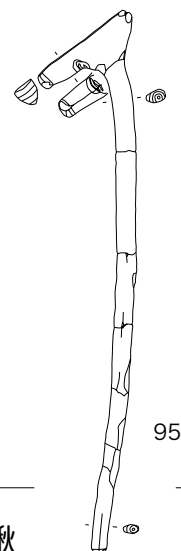
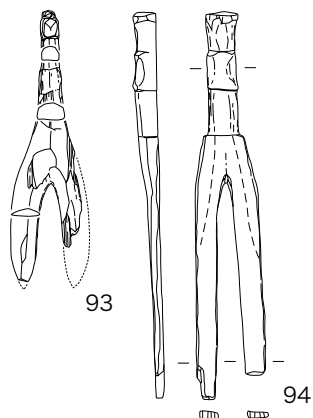
曲柄二又鋏では、弥生中期以降、伊勢湾型Ⅰ類・ナスビ形（古墳初頭～前期）へと、刃部幅

曲柄二又鍬

鍬膝柄

軸部A類

弥生Ⅲ
～Ⅳ期



伊勢湾型曲柄二又鍬Ⅰ類

ナスビ形 曲柄二又鍬

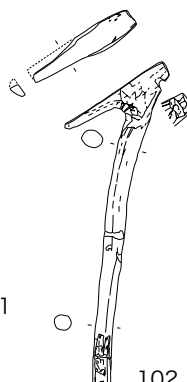
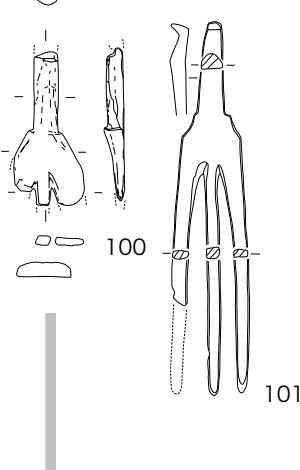
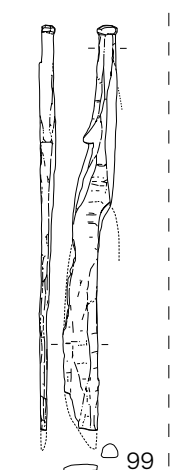
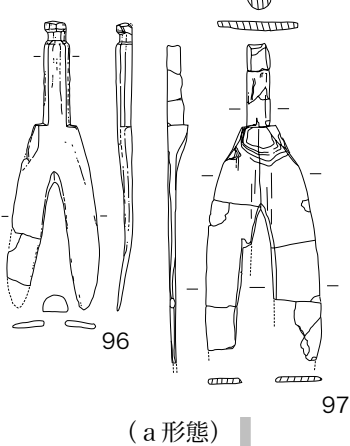
伊勢湾型曲柄三又鍬

軸部E類

軸部D類

軸部D類

弥生Ⅴ期
～古墳初頭

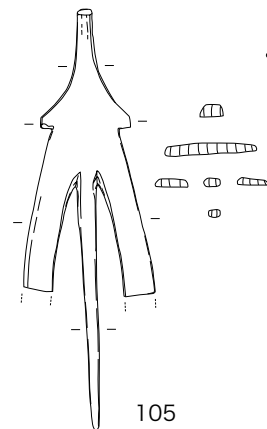
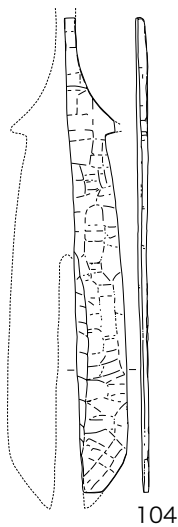
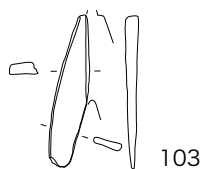


(a形態)

(b形態)

ナスビ形曲柄三又鍬

古墳前期前半
(三世紀)



- 93 三重：納所
- 96・99・104 三重：六大A
- 94・97 愛知：勝川
- 100 愛知：八王子
- 102 愛知：朝日
- 103 愛知：中狭間
- 105 岐阜：荒尾南
- 95・98 静岡：角江
- 101 静岡：岡の平

1/12 0

60 cm

55

図8 曲柄鍬編年表-3

の拡大化傾向が認められる（図 10）。ただし、古墳中期のナスビ形は、前段階に対して刃部幅が狭くなる。

大まかな傾向としては、近畿地方のデータともほぼ共通する（cf.2）。

(3) 柄の装着角度

柄（膝柄・反柄）の装着角度は 50～55°をピークとする正規分布を示す（図 11）。そのなかで、弥生 IV 期は 52.2°～72.7°と角度がやや緩やかな方にシフトしている。

5 直柄鍬の刃部幅および柄の装着角度の検討

(1) 直柄平鍬・横鍬未成品の刃部幅

本稿では、ここまで完成品についてのみ、形態分類と変遷案を提示してきたが、ここではじめて当地域の直柄平鍬・横鍬未成品の刃部幅を確認しておく（図 12）。全時期を通じて 19～22cm をピークとする正規分布を示す。時期別にみると、弥生 I～III 期は 22～25cm にピークがある。最も未成品が多い弥生 IV 期は 19～22cm に集中する一方で、分布域は 9.8cm から 29.4cm と裾野も広い。それに対し、古墳初頭以降は 16.5cm から 27.2cm と分布域がかなり狭まる。

19～22cm のピークは近畿地方の直柄平鍬未成品の刃部幅も同様である（cf.3）。ただし直柄横鍬では、近畿地方が 31～34cm をピークとする正規分布を示すのに対し、当地域では完成品が 17.9～40.5cm とバラつき、未成品も 30.0～45.8cm とかなりの幅がある。

(2) 伊勢・濃尾平野の直柄鍬（弥生 I～V 期）

直柄平鍬に関しては資料数が多いことから、時期と地域を限定して検討を試みる（図 13～15）。

まず、伊勢～濃尾平野（納所・朝日遺跡）の弥生 I～V 期では、刃部幅は 6.6cm（8）から 17.3cm（22）と、かなりの幅がある。柄孔の角度も 46.3°（19）から 74.7°（8・15）までバラつく。この範囲を示したのが図 13 の破線である。さらに同時期・地域（遺跡）の直柄平鍬未成品の刃部幅に完成品の柄孔の角度をあてはめたのがグレーのトーンをかけた範囲であ

る。未成品の刃部幅は 9.8～27.6cm で、この幅から完成品の幅まで製作過程あるいは使用段階で削り込まれたことになる。

本稿ではここまで直柄平鍬について、特に刃部幅によって広鍬と狭鍬に分けることなく分類・変遷案を示してきた。これまでの出土木製農耕具（掘削具）の研究では、おおむね広鍬と狭鍬は刃部幅 15cm を境として分けられてきた（黒崎 1970・根本 1976・上原 1993 など）。ここでその分類を適合させると、完成品で広鍬の領域には朝日遺跡の弥生 IV 期に属する 2 点（20・22）がかろうじて入るのみで、他はすべて狭鍬の領域となる。

ではここに、民具学の分野でよくもちいられる鍬の機能分類である打ち鍬・引き鍬（打引き鍬）の領域を重ねてみる。打ち鍬（土壌の反転・耕起用の鍬）の領域は一般に刃部幅 15cm 以下（5cm 以上）、柄の角度は 60～90°とされる（ドットで示した領域）。しかし引き鍬（土壌の削平・移動用の鍬）については、刃部幅 15cm 以上（25cm 以下）という点ではほぼ一致するが、柄の角度は民具学の分野では 40～45°（飯沼・堀尾 1976 など）と非常に鋭角なのに対し、出土遺物からみた根本修の研究では 45～75°とかなり広めに設定されている。本稿では一応、根本の説にしたがい、引き鍬の領域を、打引き鍬（両者の中間的な鍬）込みの範囲として斜線で示した。それによると、図 13 では、全体のおよそ 3 分の 1 が打ち鍬・引き鍬（打引き鍬）のいずれにも該当しない範囲に属することになる。直柄小型鍬はすべて狭鍬でなおかつ打ち鍬の領域に属する（グレーの枠内）。しかし、小型鍬は身部の長さが短いため、地面に深く打ち込み、土を反転させるという打ち鍬本来の機能はない。つまり、この時期には、刃部幅と柄の装着角度に明確な相関関係が存在しなかった可能性が高い。ただし固有の平面形をもつ直柄小型鍬（31～34）と、身の側縁に刃がつく平鍬 I（2）・IV 類（8・12・13・17・18・23）に関しては、他の直柄平鍬とは異なる機能を有していたとおもわれる。

(3) 東三河・西遠江の直柄鍬（弥生 III～IV 期）

東三河および西遠江では、広鍬に分類されるものが伊勢・濃尾平野より多くなり、広鍬側の

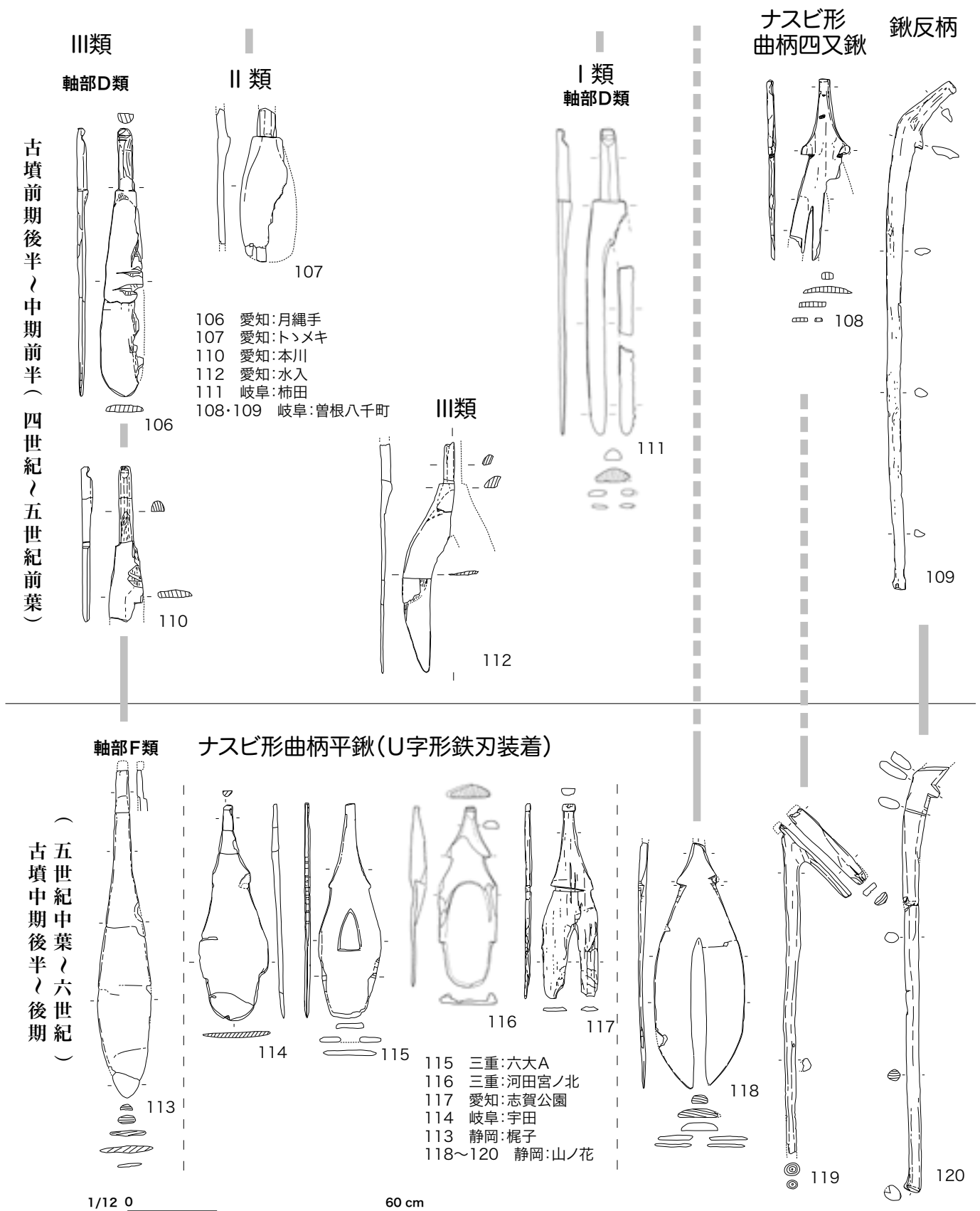


図9 曲柄鍬編年表-4

刃部幅はより広くなる傾向が認められる(図14)。しかし、やはり全体的には刃部幅・柄の装着角度は著しくバラついており、打ち鉞・引き鉞(打引き鉞)の領域を重ねても、両者に属さないものが3分の1を超えている。小型鉞は伊勢・濃尾平野と同様に打ち鉞の領域に収まるが、前述のように打ち鉞としての機能はなかったと考えている。

ここまでみてきた2地域について、直柄平鉞完成品の領域に、先に検討した弥生Ⅳ期の曲柄平鉞の領域(黒の太枠内)を重ねると、直柄平鉞(小型鉞)の大半が曲柄平鉞と重複することになる。以上のことから、弥生Ⅰ～Ⅴ期を通じて、当地域の直柄平鉞と曲柄平鉞の間には、明確な機能分化は存在しなかったと考えられる。

(4) 古墳初頭～中期の直柄鉞

最後に、古墳時代の直柄鉞を検討する(図15)。直柄平鉞は、37・51を除いてすべて広鉞の領域に属する。37は平鉞Ⅳ類で、この時期としては希少例であり、51は先に検討したように平鉞Ⅷa類からの再加工品である可能性が高いことから、この時期の直柄平鉞は刃部幅の点でかなり規格性が高いことがわかる。また、柄の装着角度も51以外は60.5～86.7°と弥生Ⅰ～Ⅴ期の直柄平鉞よりもはるかにまとまっている。

曲柄平鉞は、刃部幅が5.6～17.5cm、柄の装着角度は39.7～72.5°と、ほとんど直柄平鉞とは重ならない領域にシフトしている。

以上の点から、古墳初頭以降に関しては、直柄平鉞のほとんどを広鉞とよぶことができ、かつ曲柄平鉞との間にも明確な機能分化が認められる。これに打ち鉞・引き鉞(打引き鉞)の領域を重ねると、直柄平鉞はかろうじて引き鉞(打引き鉞)の領域に重なってくるのに対し、曲柄平鉞はいずれの領域にも属さない。それぞれの鉞の形態からその機能を想定すると、まず直柄平鉞Ⅷ(a・b)類にはすべて泥除け具を装着するための細工がほどこされている。黒崎によると泥除け具装着の鉞は、「激しく打ち下ろして土を耕起する作業には不向きで、土を反転し砕きながら引き均す作業に適した鉞」(黒崎1996)であることから、直柄平鉞Ⅷ類は

引き鉞ないしは打引き鉞の機能が相応しい。ただ近世の鉞から類推される引き鉞(装着角度が40～45°)に較べると、はるかに柄の装着角度は緩やかである。一方、曲柄平鉞については、刃部幅の点では打ち鉞に相当するが、柄の角度で打ち鉞の領域と重なる部分は少なく、むしろ引き鉞(打引き鉞)の領域にふくまれる。

直柄横鉞に関しては、刃部幅が25cm以下のものと30cmを超えるものに大きく分けることができる。柄の装着角度は50～69°と比較的狭い範囲に集中し、しかもそのほとんどに泥除け具を装着することから、ほぼ引き鉞としての機能に限定できる。

直柄払い鉞については、直柄平鉞(横鉞)・曲柄平鉞とも全くかけ離れた領域をもち、その独特の形状からも、他とは異なる特殊な機能を有していたことがわかる。

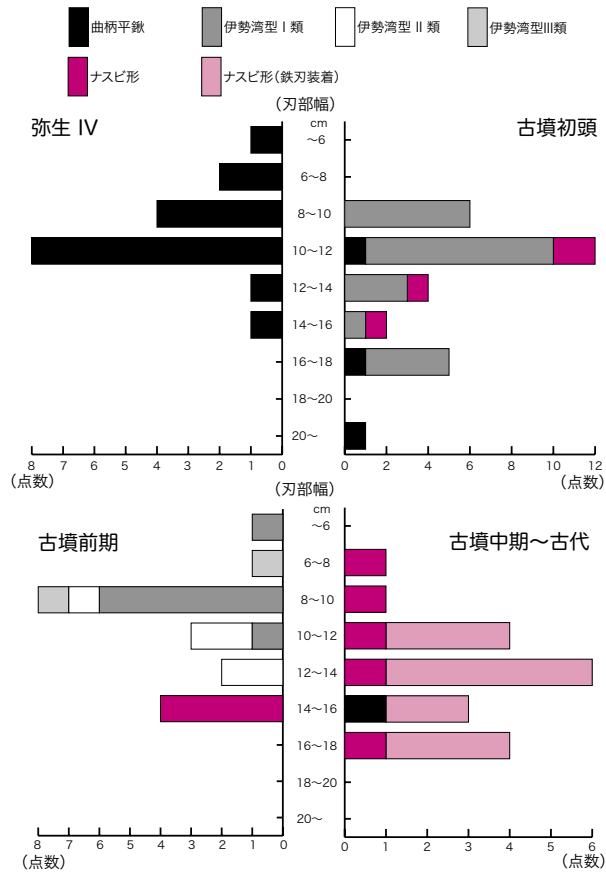
6 まとめ

前章では、伊勢湾周辺地域の鉞について、刃部幅と柄の装着角度からその機能の類推をおこなった。その結果、弥生Ⅰ～Ⅴ期には、直柄平鉞のうち、身の側縁に刃部を有するⅠ・Ⅳ類や直柄小型鉞以外は、広鉞・狭鉞という従来の分類基準も不明確で、曲柄平鉞との間にも明確な機能分化を認めることができなかった。

一定の規格性をもち、泥除け具を装着する直柄平鉞Ⅷ類が出現する古墳初頭にいたって、ようやく広鉞へのシフトが明確になり、曲柄平鉞との間にも機能差が認められるようになる。さらにこの時期、引き鉞として直柄横鉞、除草用?の直柄払い鉞が登場し、鉞の機能分化がいつそう明瞭になる。しかし、この段階でもなお、すべての鉞に対して打ち鉞・引き鉞・打引き鉞という民具学的分類が完全に適合するわけではない。とすれば、弥生～古墳時代の鉞にみる法量差には、民具学的な機能差では割りきれない、異なる原理が働いていたと考えられる。

弥生時代の鉞に関しては、沖積地にある多くの遺跡から製作途上の未成品が出土することため、基本的にどの集落でも製作されていた。製作者も専業工人とよばれる特殊な技術者ではなく、一般成員が農閑期などに製作していたとお

図9 曲柄平鎌の刃部幅分布グラフ(伊賀～西遠江:弥生IV～古代)



cf.1 近畿地方から出土した曲柄平鎌の刃部幅 (上原真人1993『木器集成図録』より)

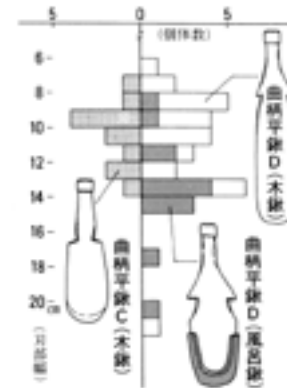


図11 膝柄・反柄の装着角度分布グラフ (伊勢～西遠江:弥生IV～古墳中期)

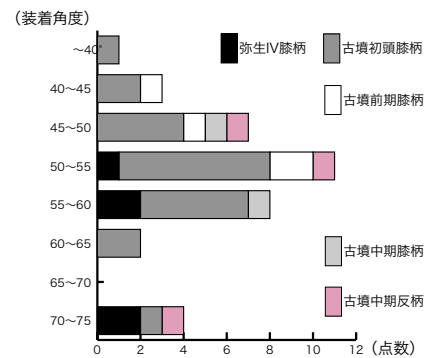
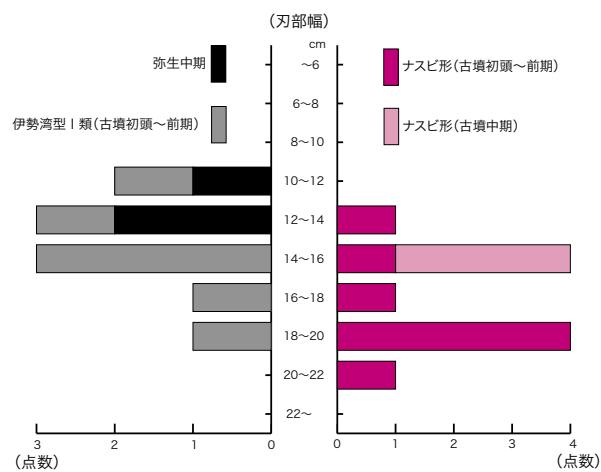


図10 曲柄二又鎌の刃部幅分布グラフ(伊賀～西遠江:弥生III～古墳中期)



cf.2 近畿地方から出土した曲柄二又鎌の刃部幅 (上原真人1993『木器集成図録』より)

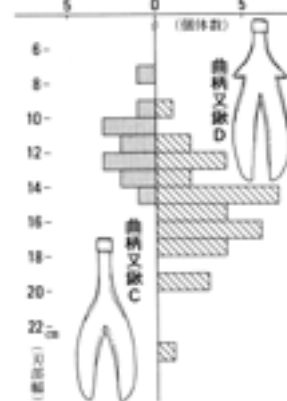
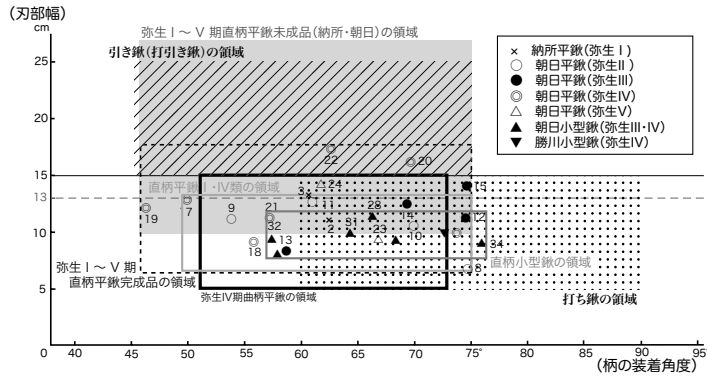


図13 直柄平鍬・小型鍬の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ
(伊勢・濃尾平野:弥生Ⅰ～Ⅴ期)



cf.3 近畿地方出土の直柄平鍬・横鍬の刃部幅
(上原真人1993『木器集成図録』より)

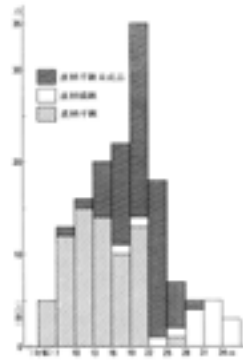


図14 直柄平鍬・小型鍬の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ
(東三河・西遠江:弥生Ⅲ～Ⅳ期)

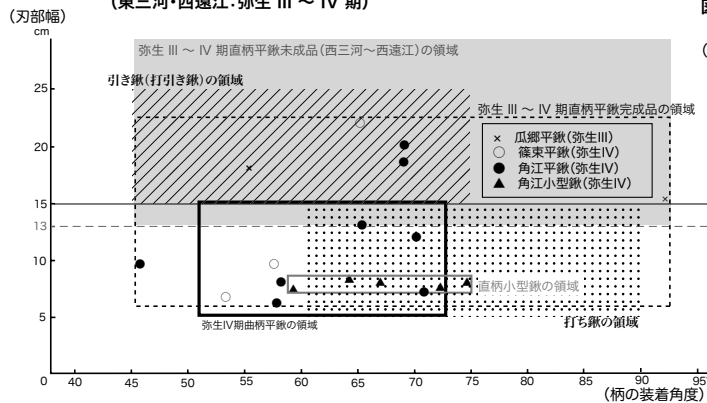


図12 直柄平鍬・横鍬未完成品の刃部幅分布グラフ
(伊勢～西遠江:弥生Ⅰ期～古墳中期)

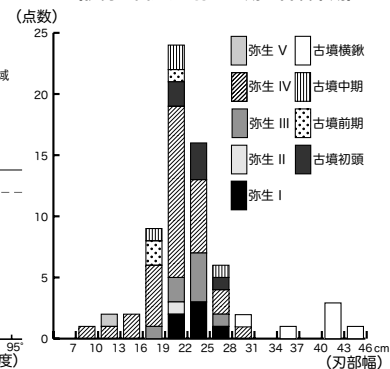
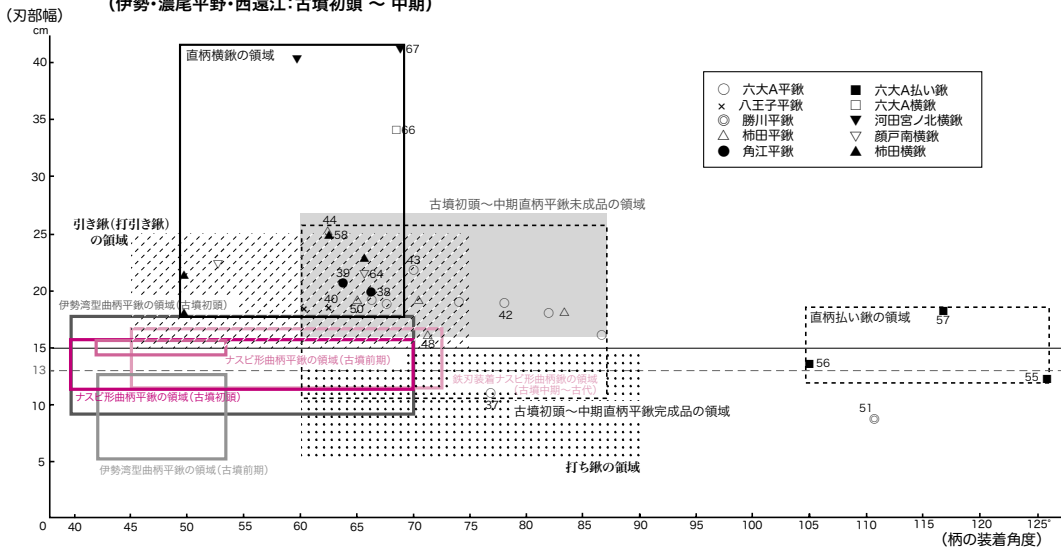


図15 直柄平鍬・横鍬・払い鍬の刃部幅・柄の装着角度相関関係グラフ
(伊勢・濃尾平野・西遠江:古墳初頭～中期)



もわれる（樋上 2005）。とすれば、この時期は鍬の製作者と使用者が、同一ないしは互いの顔がみえるようなきわめて近い関係にあったといえる。すなわち、刃部幅や柄の装着角度にみる著しいバラつきは、柄の長さもふくめて使用者の身体的特徴や作業姿勢などの違い（好み）を反映していた可能性がある。

さらに、西三河以東の直柄平鍬に較べて、濃尾平野（朝日遺跡）の刃部幅が総じて狭いことについては、鍬を作るためにその集落で調達できる原材の太さの差を反映している可能性も考えられる（樋上 2002）。

古墳初頭（弥生終末期）以降、直柄平鍬未成品（特に連続成形品）は沖積地の集落から姿を消し、山間部や丘陵（洪積台地）の縁辺部に立地する集落からしか出土しなくなる。この時期から、鍬の原材となるアカガシ亜属の大径材（直径 70cm 以上）が確保できる集落に鍬の製作地が限定され、木材資源に乏しい沖積地の集落は完成品（あるいは半完成品）の供給をうけるのみとなる（穂積 2000・樋上 2005）。直柄平鍬の規格化が著しく進行し、未成品と完成品の領域がほとんど重なるのは、このためであろう。ただし、柄の装着角度は未だ若干のバラつきがあることから、着柄のみは使用者側でおこなわれていたとおもわれる。

この時期の鍬が、生産地と消費地の間で、どのようなかたちで取引されていたのかは不明である。しかし規格化の進行は、すでに商品と

しての鍬の第一歩を踏み出している可能性がある。その傾向がよりいっそう明確になるのは、直柄風呂鍬（図 4-53）の出現以降と筆者は考えている。この段階をもって、弥生 I 期（あるいは縄紋晩期）以来続いた直柄平鍬の伝統が途絶え、かつ古墳前半期には隆盛をきわめたナスビ形（および伊勢湾型）曲柄鍬も終息にむかっていくという点で、この直柄風呂鍬の成立は非常に大きな意味をもっている。近世の農書や民具学の研究から復原される「打ち鍬・引き鍬・打引き鍬」という機能分化の、本当の意味での出発点も、この直柄風呂鍬が登場して以降のことだとおもわれる。ただ、この古墳後期～中世の直柄風呂鍬はいまだ全国的にも数えるほどしか出土していない（山田 1998）。今後、これらの資料が増加し、本稿で示したような分析をおこなうことができれば、民具学からも追える近世の鍬への道筋がみえてくるのではなかろうか。

謝辞

本稿は、2005 年 3 月におこなわれた唐古・鍵遺跡共同研究における口頭発表を骨子としている。今回文章を作成するにあたり、つぎの方々より貴重なご教示を得たことを記します。

植田信太郎・金原正明・寺澤 薫・外山秀一・福田栄治・藤田三郎・穂積裕昌・山田昌久（敬称略、50 音順）

参考文献

- 飯沼二郎・堀尾尚志 1976『農具』ものと人間の文化史 19 法政大学出版局。
- 上原真人 1993『木器集成図録 近畿原始篇（解説）』奈良国立文化財研究所史料第 36 冊。
- 黒崎 直 1970「木製農具の性格と弥生社会の動向」『考古学研究』第 16 巻第 3 号 考古学研究会。
- 黒崎 直 1996『古代の農具』日本の美術 No.357 至文堂。
- 根本 修 1976「木製農具の意義」『考古学研究』第 22 巻第 4 号 考古学研究会。
- 樋上 昇 1989「木製農具の地域色とその変遷—勝川遺跡出土資料を中心として—」『年報 昭和 63 年度』（財）愛知県埋蔵文化財センター。
- 樋上 昇 1993「木製農具研究の一視点—ナスビ形農具の出現から消滅まで—」『考古学フォーラム』3。
- 樋上 昇 2000a「東海系曲柄鍬再論」『考古学フォーラム』12。
- 樋上 昇 2000b「3～5 世紀の地域間交流—東海系曲柄鍬の波及と展開—」『日本考古学』第 10 号 日本考古学協会。
- 樋上 昇 2002「樹種からみた尾張地域の木製品」『考古学フォーラム』15。
- 樋上 昇 2005「木製品専業工人の出現と展開—伊勢湾周辺地域における木製品の生産と流通をめぐって—（上・下）」『古代学研究』168・169 号 古代学研究会。
- 穂積裕昌 2000「弥生時代から古墳時代の木器生産体制について—三重県内の木器出土遺跡からの素描—」『研究紀要』第 9 号 三重県埋蔵文化財センター。
- 宮本常一 1979『民具学の提唱』未来社。
- 山田昌久 1998「風呂鍬の成立と展開」『人類誌集報 1998』東京都立大学考古学報告 3。
- 山田昌久 2003『考古資料大観 第 8 巻 弥生・古墳時代 木・繊維製品』小学館。